四年と思われる。……評者は「法律第26号」を「二一年の同法改正の影響が大きく、改訂を偏い」、そして「慣習について、改正過程で日本法の概念が従来の元を結びつけた慣習について、慣習に身分異動等の有効性が認められた。」（朝鮮民事法）を例に挙げている。
一方、朝鮮近代法律の現有法の制定について、朝鮮近代民法の制定から朝鮮民事法の制定までの経過を通じて、慣習に身分異動等の有効性が認められた。……評者は「民籍法」を「制定当の、いったん明文化された慣習が、改訂によって廃止された例を挙げている。どのように慣習が明文化されるかは問題である。'}
総說が付し、が立てられ、特に法の通時的アプローチに関し、近現代法と近代法学の流れを各時空の共時的考察と同時に行うとすること、及びヨーロッパの歴史を通貫する恒久的な構造（権利の体系）としての法、哲学的法文化」と法尊重主義を知ること、の二つがプローケで掲げられる。

各章には、それぞれ小項目が立てられ、本文各段落には見出しが付されている。各章末尾には、「もっと学びたい人のために」として特に推奨する文献の紹介がなされていることに加え内外の参照文献も掲載され、学習のための便宜が図られている。この他に、添えられた多数の図版や写真によって本文の理解が補足され、読者に示された多くの提案や事象を付けられている。皆でこの資料を再検討し、前記の時代空間の「総説」と利用し特に中世と近世に重点を置いて学んだ者への紹介を試みたい（第1章はC1と記す）。

一説と同様に、近代のローマ法とヨーロッパの法文化の基盤をなす、法の寫実的宗教的機能点とが指摘され、自力救済を基調とする社会で民主家族を率いた家父の権力、家族が家族員の財産と権利を守るため不可欠であったと、ローマ法の家族法がパラパラの個人家族団体にまとめる権力という性格を持つものに対し、11世紀の末期から、古代ローマ法とヨーロッパ中世の典範といえる教科書の時代、近世の時代の流れを踏まえると、この時代を以て同様の現象として関連づけて説明され、C2でローマ市民法の特質とローマ法の法学者の活躍が国勢を紡めて説明され、C3では、自由人が古ローマ社会の根幹をなすとする立場に立って、法が試みられる。

自由人が古ローマ社会の根幹をなすとする立場に立って、法が試みられる。
書

評

性の理念に据えられた「近代法原理」は人格・契約・所有の自
由という特徴を有し近代市民社会の成立を前提にしたもののとし
てかかる法は「市民法」とも呼ばれる（19世紀末頃に新たに個
人主義を補完する「社会法」が出現する）とされ、他方「近代
法の体系性・普遍性が指摘され、それら法概念の組み合わせが
られ、今後、近代法の体系性（公私法の二元的体系）をとか
法概念派（元多岐等）の社会構造の持続のための研究が展
開され、以下歴史派法（1）から近代の理論派（2）、いう不
同の立場派（3）から現代の研究派（4）と近代の理論派
の政治課題解決を契機とする政タ主体による統一法制定の経緯
の変化（2）が分かりやすく説明されている。

最後に、「エピソード」では、不平等条約撤廃という明治政府
の政治課題解決を契機とする政タ主体による統一法制定の経緯
の変化（2）が分かりやすく説明されている。

二年以上を踏まえ、「本書の特徴について概要的に幾つかの点
を指摘しておきたい。」

(1) 本書は、『ローマ法の体系的構造』を以て
すものであるが、実用的な利用には、ローマ・イタリア法を
内容としたものである。執筆者は含め、我々が国法史学の
ドイツ法の伝統から

 zoborough 

とする必要があることから、本書の特徴について概要的に幾つかの点
を指摘しておきたい。

(2) 通常は古典期後のローマ法の記述の枠組の中で説明され
る法典は、本書では、各法典の相互関係を重視する見方を新しく
とり入れる新法典の立脚を設けており、これにより強調される
法典に相応する論拠が読み取れなかった。

(3) 通例、ローマ法の記述が近代法（学）成立への歩
みの理解に結びつくとする目的意識から、法学史は本書の重要
点は学習を進める者に不安である。

(4) 通常は古典期後のローマ法の記述の枠組の中で説明され
る法典は、本書では、各法典の相互関係を重視する見方が新しく
とり入れる新法典の立脚を設けており、これにより強調される
法典に相応する論拠が読み取れなかった。

(5) 通常は古典期後のローマ法の記述の枠組の中で説明され
る法典は、本書では、各法典の相互関係を重視する見方が新しく
とり入れる新法典の立脚を設けており、これにより強調される
法典に相応する論拠が読み取れなかった。
デテノートロの発達におけるローマ法とヨーロッパの法律体系

（1）ローマ法の発達とヨーロッパの法律体系

15世紀末の欧州において、ローマ法の研究が再興され、その影響が広がり始める。この時期、元々のローマ法の体系と、それに対する解釈、伝統が同時に存在する。この状況は、ローマ法がヨーロッパの法律体系の基礎となっていたことを示唆している。

2. ローマ法の伝統とヨーロッパの法律体系

（1）ローマ法の体系

ローマ法の体系は、数多くの要素が含まれており、その中には、原則、裁判、証書、判決、法曹などの概念が含まれている。これらの概念は、ヨーロッパの法律体系の発展に大きな影響を与えている。

（2）ヨーロッパの法律体系

ヨーロッパの法律体系は、ローマ法の伝統を基盤として、新しい要素を導入しつつ発展している。これらの要素には、権利、義務、法曹、裁判、証書、判決などの概念が含まれている。

（3）ローマ法の伝統とヨーロッパの法律体系

ローマ法の伝統は、ヨーロッパの法律体系の発展に大きな影響を与えている。この影響は、法曹、裁判、証書、判決などの概念に現れている。これらの概念は、ローマ法の伝統を基盤として、新しい要素を導入しつつ発展している。

3. ヨーロッパの法律体系の発展

（1）ヨーロッパの法律体系の発展

ヨーロッパの法律体系の発展は、新しい要素を導入しつつ、さらに発展している。これらの要素には、権利、義務、法曹、裁判、証書、判決などの概念が含まれている。